

黄昏の Melville に忍び寄る
Hawthorne の影：
辞世の書 *Billy Budd*

—クィア・リーディングの試み—

佐々木 英 哲

序 Hawthorne に憧憬する Melville

I. Foucault 的家族監視戦略

II. Anal Society を生きる男達

III. (擬似) 兄弟間の葛藤

結語の試み Hawthorne/*American Innocence*/*American Beauty* を
憎悪する Melville

序 Hawthorne に憧憬する Melville

1851年、*Moby-Dick; or, the Whale* を評価してくれた先輩作家 Nathaniel Hawthorne (1804-64) に Herman Melville (1819-91) は礼状を出した。その中で神の顕現とキリスト教という聖餐式のイメージを借用しながら、メルヴィルはこのようなしたためる。

聖餐式でちぎり取られるパンのように神聖なものが細かく切り取られていき、その細かいひとかけら、ひとかけらが自分達であるかの

* 本学国際教養学部

キーワード：Hawthorne, 無垢, 兄弟間の葛藤, 家族監視戦略, Anal Society

ように感じます。そうです。ここから無限の兄弟の愛が広がるのです。[17?] November 1851 (*Correspondence* 212)

ところが Melville は『白鯨』を刊行する一年も前に評論“Hawthorne and His Mosses” (1850) にて、プラトンの一線をすでに越えていた——ある意味で。そこでは、ホーソーンを男性に、自らを女性に、準えて二人の関係を肉体的性的な行為で表現する。結果としてそれは妊娠のイメージを想起させる描写となった。

[ホーソーン] のことを思えば思うほど、彼は大きくなり [私の体の] 深く深く奥まで入ってくる。私はすでに感じている。ホーソーンが私の魂に生命力漲る種を落としたのを。力強いニューイングランドの根は、情熱にあふれた私の南国的な魂の土壤に勢いよく広がっていく。(Lyda 417)

このような関係は、ご多分に漏れず、長く続くものではなかった。1852年、ホーソーンはメルヴィルとの交友を暖めたレノックスを離れ、コンコードへと去って行ったのである。これはホーソーンを慕うメルヴィルにとって大きな精神的痛手となり、心的外傷後ストレス傷害 (PTSD) として生涯メルヴィルを苦しめることとなる。

いわゆる PTSD なるものは、いったん治まったかに見えても、人生の一サイクルが終わる晩年になって、再び、その鎌首をもたげ、かつての極限状況を記憶のなかで再燃させ、人を苦しめるといふ。ホロコーストを生き延びたユダヤ人達、旧日本兵に性的暴力を受けた中国人女性達、広島・長崎の被爆者達、東京大空襲の被災者達などには、戦後六十数年を経た今、PTSD を再発させる者が稀ではないという。そのような事例を精神病理学

黄昏の Melville に忍び寄る Hawthorne の影：辞世の書 *Billy Budd*

を専門とする野田正彰は臨床的立場で幾度となく目にしてきたという。

メルヴィルの場合、如何なる形で PTSD を再発させ、如何なる症状を呈したのであろうか。両作家の蜜月時代からおよそ三十五年近くもの風霜を重ねた1886年前後のこと、メルヴィルは *Billy Budd* (1924) を書くために筆を執り、作品を未完にしたまま、1891年、死をもって筆をおいた。自らの死を目前に控えたメルヴィルの意識裡に、すでに死して久しいホーソーンは、如何なる「いでたち」で立ち現れたのであろうか。作品『ビリー・バッド』にホーソーンが如何なる影を落としているのであろうか。

今回、メルヴィルの遺作『ビリー・バッド』をめぐる議論を進めていくにあたっては、ひとつの作業仮説を設定したい。その作業仮説とは、この作品に於いては、¹⁾ 家族と同性愛を巡る二本の軸が交差し、その二軸の交点にホーソーンを巡る問題軸が貫通する形になっている、とするものである。煩くなるのを敢えて承知の上で繰り返すと本稿の目的は、『ビリー・バッド』の作品空間を支える屋台骨となる三軸の結節点に浮上するメルヴィルのホーソーン像を復元することである。

1. Foucault 的家族監視戦略

さて、これから議論を進めていくにあたっては、作品を貫く一本目の軸、家族めぐる問題軸を議論展開の主軸として据えることにしたい。というのも、そもそも戦艦という閉じた空間を舞台とする作品『ビリー・バッド』はフロイト的家族ロマンスの形式を採っているからだ。戦艦という空間は、ある意味で家族空間に等しい。その背景には、すべからく社会組織は父権的家族に範を求むべしとする言説が、当時、幅を利かせていた、という歴史的事実が存在する。

Heman Humphrey (1779-1861) なる人物はイェール大学出身で1823年から1845年にかけてアマースト大学学長として職務に専念した人物である

が、ハンフリーはその著『家庭教育』(*Domestic Education*, 1840)の中で「国家の有益なる法には〔国民を〕素直に従わせる。確実に従わせること、それが肝心要だとするのならば、同様に、家族統治も必要欠くべからざるくらい重要だ」と述べ、国家と家族が不可分の関係にあることを繰り返して説き、それを踏まえたくて国民を統制する必要を訴えた。ハンフリーがイメージしているのは、言うまでもなく父権家族のことであり、「あらゆる家族は一つの小国家であり、それ自体、帝国だと言ってもよく、家父長によって統率される」と²⁾ 自らの信念を力説する。

翻ってメルヴィルの作品『ビリー・バッド』を顧みるならば、帝国主義を背景にした軍艦 *Bellipotent* 号で家父長に相当する御仁がいるのだろうか？ 艦長 Vere は家父長として果たして適任なのだろうか？ 答は否である。ヴィア艦長のニックネームは *Starry Vere* であり、そのあだ名は、宇宙的秩序、絶対秩序を暗示する *Starry* 「星のような」に由来する。ヴィアは本来ならば権力を代表してよいはずであるし、またそうあるべきなのかもしれないが、実際には代表者、権力者として適格とは言い難い。それが証拠に、肝心なときに艦長ともあろうヴィアは取り乱してしまうからだ。ヴィア艦長は死亡した *Claggart* の検分を仰ぐため軍医に立会いと医学的所見を求めるが、そのときヴィアは動揺を抑え切ることができなかったのである。実際、艦長は気がふれてしまったのだろうか？ そのときのヴィア艦長の様子、つまり尋常ならざる興奮状態と怒鳴り声をのちになって思い起こした軍医は、ヴィアの状態を危惧するありさまであった。

権力者としてのヴィアの適格性を判断するに際して、ポスト構造主義の旗振り役、Michel Foucault の理論を援用したい。フーコーによれば、(1) 権力とは、規律訓練というひとつの機能のなかに、実際の生きた人間をあてがうものであること。(2) いうならば、実際の人間を「規律訓練」に置き換えてしまうのが権力であること。(3) ここでいう規律とか訓練は、表面に

は名前が出ない者達、顔の見えない者達によって実践される行為であること。権力は、その業務を一般の人間に代行させること。別言すれば、権力は匿名的で至る所に偏在すること。あらゆるところに権力はその触手を伸ばし、人は権力から逃れることはないこと (Brodhead 146)。このようなフーコーの理論を援用するならば、ヴィア艦長が家父長として実力を行使する必要などさらさないわけで、権力執行業務を代理人の手に委ねさえすれば事足りる、ということになるだろう。その代理人の役を買って出るのが、クラガートなのだ。クラガートはクラガートで本人に気づかれないように *Billy Budd* を秘かに迫害する。手下を総動員し地下ネットワーク組織を作りビリーを包囲する。至る所に匿名的な権力の網を張り巡らせビリーを囲い込む。こうしてクラガートは、まさにフーコー張りの構図に則り行動する。

ところで、イエール大学学長 Jeremiah Day が James Kingsley との連名で出した「イエール学寮教育方針に関する報告書1830年度版」(*The 1830 Reports on the course of Instruction in Yale College*) には、次のような記載がある。その記載は、フーコーの流れを汲む社会学者で家族と近代国家の在り方を分析した Jacques Donzelot の言う「家族を通じた統治」、「近代家族と国家の管理装置」を図らずも見事に例証する。瞳目すべきは以下の引用箇所である。

学生達は一つの家族のような形で集まっているわけだから、何人かの舎監達がこの家族の構成員として加わることが、学寮の内部取締り上、不可欠だと思われる。……個々の学生についての情報が、舎監の手で管理されることが大切なのだ。大学直属の舎監を家族の構成員として学生達の中に送り込むことにより、些細な情報も掻き集めさせる。収集した情報は必要に応じて、委員会に報告させること

もありうる。云々。(The 1830 Reports)

このような19世紀前葉のイエール学寮に見られる内部警察的な監視システム／家族監視システム／家族戦略は、18世紀末に時代を設定した作品『ビリー・バッド』で先取りされている。作品『ビリー・バッド』の軍艦ベリポテント号で水兵の監視と艦内の秩序維持を任務とする下士官が配置されている事実——その下士官クラガートにスポットライトが当てられているという事実——が、家族監視システムの存在を如実に物語る。軍艦内の父権的家族秩序は、クラガートが代表するこのような監視システムによって保たれている。

II. Anal Society を生きる男達

フロイドの衣鉢を継ぐ Béla Grunberger は、父権的な現実世界、競争主義の原理が支配する社会、階層秩序に基づく現実社会を肛門的社会 (Anal Society) と呼び (164)、それ以前の発達段階＝口唇ナルチシズム期の世界と峻別する。口唇ナルチシズム期に形成される口唇ナルチシズム的世界は、メルヴィルで言うならば作品『ピエール』(Pierre: or, The Ambiguities, 1852) の同名の主人公が体現するような理想主義、純粹さ、精神主義、光明の世界で、自我の限界や論理も消滅し快感原則が支配する世界である。もしこう言ってよければ夢、妄想、麻薬中毒状態にも等しい世界であると言える。一方、人間心理の発達段階として口唇ナルチシズム期に続く肛門期に構築される肛門的世界では現実原則が支配し、そこでは論理的範疇や時空間の範疇も存在すると、グランバーガーをはじめとする心理学者らは唱えている。自らの自然欲求 (排泄欲求／自己愛) を制御できるという意味で、心理発達段階上、肛門期は口唇ナルチシズム期より上位に位置するが、ただ性器的な愛の展開が可能になるまでには至っていないという。誤

解のないよう急いで申し添えておくと、精神分析学で言う性的な愛の展開とは、クィア (queer) 的な文脈に引きつけた場合、単に異なる性器を持つ者同士が愛し合う、という次限を超えて、自らと異なるパーソナリティを有する他者を愛する行為をも含意するものである。グランバーガーによれば、「肛門的社会は徹頭徹尾、階層的で、秩序化された行動で支えられており、その構成員達は規律なるものを自ら引き受けると同時に自らの上に課しはするものの、そういった規律の意味合いを十分に主体化していないため、構成員達の心の内には疑心暗鬼が生じ、互いに敵対視するようになる」(164)。したがって「肛門的世界」は、地下道、下水、穴倉、地獄といったネガティブなイメージを誘発する。実際、ベリポテント (*Bellipotent*) 号の Belli- は悪臭を放つ下腹 (belly) を連想させるものだ。また「肛門的世界」は地下に住む不潔な小動物、ネズミ (科の動物) の存在によっても顕在化する。Jacques Derrida の用語を借用すれば、不潔な小動物によって代補される。作品『ビリー・バッド』における具体例は枚挙に遑がない。ビリーを商船から有無を言わせず海軍に強制徴用した RATcliff 少尉。Claggart の最後三文字の順序を変えることで、現出／幻出する RAT (ClaggRAT)。クラガートの手下 (=Rat-pack/Cat's Paw) でネズミの鳴き声があだ名となる Squeak (チュウチュウ)。イタチ (すなわちネズミと同じく齧歯類) のような小さな目 (weasel eyes) をして秘かにビリーを監視する Dansker。こういった否定的なイメージで表象される階層社会に身を置くのがクラガートであり、ヴィア艦長であり、ビリーというわけだ。

そのような肛門的階層世界、それは取りも直さず父権家族的かつ軍隊的な社会であり、競争主義的組織社会である。経済的利益を追求することが教条となっているこの男性社会にあっては当然のことながら、愛なるもの、特に女性への (女性との) 愛 (もし、こういってよければ性的愛) を排

除しようとする力が働くことが、予想できる。実際、19世紀欧米社会に漂っていたのは、愛情、女性的なもの、女性、女性的な男性に対する嫌悪感、女性嫌いの空気、女性のポジションに置かれた有色人種を蔑視する空気である。この時代、白人中産階級の男性達を中心とする欧米人達は、帝国主義による海外進出政策の下で、他人種・他民族の文化に対する欧米文化の歴然たる差を意識するようになっていた。科学技術を中心とするという意味で欧米文化の他文化に対する圧倒的優位を確信した白人中産階級の男達は、実証的推論に基づいて構築されたダーウィン進化論を主観的に歪曲し、女性、幼児、非白人、労働者階級を特殊な色眼鏡で眺めるようになっていたのだ。同性愛とはほとんど紙一重の差できわどい均衡関係を維持する共同利益を追求する男達のホモソシアル同盟が構築され強化されたのは、白人男性優越主義と期を一にする、と断言したところで、決定的外れとはなるまい。

ホモソシアルとホモセクシュアルの「きわどい均衡関係」は、クラガートとヴィアが体现する。しかも興味深いことに、「漆黒の卷毛」とか「黄褐色を帯びた」(64) などといった非白人的身体特徴をクラガートの場合は併せ持つから、クラガートの身体表象は「白人」男性優越主義というホモソシアル／ホモセクシャルの成立基盤の脆弱性をもの見事に露呈することになる。そのクラガートは水兵達から Jemmy Legs なるあだ名をつけられているが、オクスフォード辞典によれば、この Jemmy なる名前の含意として、しゃれ者、めかし屋、女々しい男といったニュアンスを持つ語が連なり、ここからクラガートが同性愛者である可能性が強まる。そのようなクラガートが、艦長ヴィアに向かってピリーが反乱計画の首謀者だと告発するのだ。そのときクラガートは“mantrap under the daisies” (95) なるフレーズを使ってヴィアを説き伏せようとする。その言葉の意味を艦長ヴィアが反芻することになる。そこで、問題となる言葉、つまり、「雛

菊の下に隠された恐ろしい人捕りの罠」に注目しよう。雛菊には「女々しい男、同性愛者」の意味があるから、mantrap=人捕り罠とはもちろん男を仕掛ける罠と考えられる。クラガートは後述するように自分自身が隠れ同性愛者であるのにもかかわらず、あるいはまさに隠れ同性愛者であるがゆえに、ビリーを同性愛者であると、告発していると言ってもよい。そのような告発を聞き届けるヴィア艦長自体、隠れホモセクシュアルのクラガートに生理的嫌悪感を隠そうとしないその一方で、青年水兵ビリーに対して特別なホモエロティシズムに起因する感情を抱いていることが判明する。「もっと自分の目が届く範囲の部署にビリーを異動昇進させ」と考えている(95)。ヴィアは「人間のじつに見事な標本」である「ビリーを裸にしてポーズをとらせたらいヴに誘惑されて墮落する前の女性を知らない若いアダムの像」(94)の代わりになるだろうと、ホモエロティシズムに満ち溢れた視線をビリーに向けて躊躇うこともなく放っているのだ。つまり同性愛者クラガートが同性愛的魔力を放つビリーを告発し、その告発を同性愛者ヴィアが聞き入れるというクィア(Queer)な空気が充満するホモソシアル空間(／肛門的世界)内での事件が、この物語だというわけである。

なるほど、ホモソシアルとホモセクシアルとが微妙にせめぎあっている事実は、クラガートとヴィアの行動をモニタリングすれば、容易に理解できるだろう。しかしながら、そもそも、クラガートによるビリーに対するサディスティックな心理が発動するメカニズムは、女性排除、および男性にも内在する女性性を排除することで男達だけの利益を守る、という Sedgwick のホモソシアル理論からだけで、説明し切れるものなのだろうか。

Ⅲ. (擬似) 兄弟間の葛藤

クラガートは高度に組織化された軍隊という階層社会（心理学的に言うならば肛門的社会）で、軍隊経験がなかったのにも関わらず、出世競争（RAT-race）を勝ち抜き下士官にスピード出世していく。そのクラガートがあとから来た新参者ビリーに脅威を感じたのは想像するに難しくはない。ビリーを出世競争での新たな自分へのライバル挑戦者として捉えるからである。そこには一人の父親を巡る、いや父親の人物、家父長的人物を巡る愛と嫉妬の問題が絡んでいる。父権的秩序空間を統帥する立場にあるヴィア艦長は、業績や能力で部下の昇進を図り部下には公平に接するべきであるのに、見てくれが良く、健康的、際立って眉目秀麗なビリーに対して特別な態度を隠そうとせず、ビリーを他の者より速く昇進させようとする。

よく読むと、天使のように美しいと形容されてもおかしくないビリーと、悪魔のように陰険で本来ならば醜さが強調されてしかるべきクラガートとは、似た者同士といったところがある。なんとなれば、ビリーが中性的な美を備えているように、「顔は整い、決して見栄えが悪いわけではない」クラガートもハンサムであることは紛れもない事実であり、また「手はあまりに小さく美しすぎる」（64）とあるからクラガートも中性的な美を備えているからだ。ただ、ビリーがナンバー・ワンであり、クラガートがナンバー・ツーなのである。さながら兄弟のように似た者同士が父親の愛を巡って争う地獄絵図を繰り返していきことが予想される。「禁止されていなかったのならば、そして運命がこうでなかったのならば、ビリーを愛することだってできたのに」（87-88）と、涙ぐむクラガートは、艦長ヴィアに反乱計画の首謀者だとビリーを告発し、悪魔 Satan に変容していく。そもそも Satan という言葉はヘブライ語で告発者の謂いであり、クラガート

黄昏の Melville に忍び寄る Hawthorne の影：辞世の書 *Billy Budd*

のサタンへの変貌は John Milton の『失樂園』(*Paradise Lost*, 1667) を喚起させる。

ああ、地獄だ！ こみあげてくるこの悲しみに曇るわたしの眼は、
いったい何を見ているというのか？ われわれが享けていた祝福の
座にかくも高くあげられているこれらの者は、われわれとは異なっ
た、恐らくは土から生まれた者に違いない。天使でないことは確か
だ。だが、天上の輝ける天使に比べても余り劣っていない。……わ
たしの心は驚嘆の念に充たされ、ともすれば愛情さえ覚える。
(*Paradise Lost*: 4.358-63) (訳 宮園)

クラガートのサタンへの変容を説明するのにミルトンに言及したが、ミルトンへの言及は決して牽強附会とはなるまい。というのも、伝記的側面から探りを入れている Cohen と Yannela の研究によれば、メルヴィルはサンフランシスコへの船旅でミルトン詩集を携えて向かったという事実の裏打ちが存在するからだ。

ミルトンの『失樂園』において、ちょうど神に仕えるナンバー・ワンであったサタンが樂園を追放され、その樂園にあらたに住むようになった人間にサタンは嫉妬する。同様に、メルヴィルの『ビリー・バッド』において、ヴィア艦長の右腕であると秘かに信じていたクラガートは、新参のビリーがヴィア艦長のナンバー・ワンになったことで、ビリーに嫉妬するのである。いや、嫉妬するばかりではない。クラガートは自分にとって樂園と準えられる軍隊から追放される恐怖と屈辱を味わうことになりかねないのだ。本国イギリスでテロの主謀者としての嫌疑をかけられていたため、避難先を求めて海軍に志願したのでは、という黒い噂が水兵達の間で拡まっていたというから、軍艦はクラガートにとって樂園とまでは言わずとも、

避難所であったことは間違いない。そこから追放される可能性が現実味を帯びてきたとなると、クラガートは生命の危機に曝されることとなる。

ミルトンの『失樂園』では、「追放される者」対「追放する者、新参者」＝「サタン」対「人間」という構図が描かれる。メルヴィルがそしてクラガートが思い描く構図も、「追放される者」対「追放する者、新参者」となる。だからこそクラガートは、樂園から追放されるサタンをシンボライズする蛇として表象される。事実、ビリーをヴィア艦長に告発するときのクラガートの「催眠術をかけるような視線」は「蛇が獲物を射撃するような視線そのものだった」(98)とある。

フェミニズムに拠って立つ批評家達がこぞって指摘するように、現実はさておき言説の上で、19世紀中産階級にあって家庭とは情愛に溢れた家族の親密空間であり、家庭は汚れた外の世界をシャットアウトする神聖空間として位置づけられる。つまり家庭とはドメスティック・ヘヴン(Domestic Heaven)として位置づけられる空間である。そのような家庭／樂園から、あるいは中産階級父権家族にたとえられる軍艦から、今、自分は追放されようとしている……とクラガートは勝手に思い込むわけである。

さきほど、『ビリー・バッド』では、さながら兄弟のように似た者同士が父親の愛を巡って争う絵図が展開する、と述べた。そもそも Billy の最初の文字 B を大文字ではなく小文字で書く billy としてオクスフォード辞典をひくと、その意味として「兄弟、仲間、戦友、友人」といった言葉が連なる。フロイト心理学派の Irvine Schiffer に拠って立つ Joseph Adamson は、「メルヴィルの作品には兄弟間の葛藤のテーマが一貫して貫かれている」と指摘し、さらに「嫉妬に連なる攻撃性は前エディプス的であり、幼少期の兄弟間の争い、母親の愛を巡る争いに端を発している」(196)、と指摘している。「幼少期の兄弟間の争い」という指摘は、正鵠を得ている。なぜならば、この作品での争いは、Baby と呼ばれたビリーと年長のクラ

ガートとの争いとなっているからだ。しかしながら、メルヴィルの作品『ビリー・バッド』の場合、父親的人物＝ヴィア艦長の愛情配分をめぐるクラガートとビリーの争いとなっており、フロイト・ダイナミクスをそのまま適用することは難しいと言えそうだ。ここでは紙面の関係で詳述は避けるが、そもそもヴィア艦長その人自体のジェンダーが曖昧で父親的であるか母親的であるかを詮索することは、無意味化している。³⁾むしろヴィア艦長が形式上家長ポジションを占める軍艦ベリポテントの空間は、ポスト・エディプス空間だと定義しておきたい。

ここで議論の俎上に上がるヴィア艦長であるが、彼はクラガートに生理的嫌悪感を覚え拒絶する。そのようなヴィア艦長を眺めるクラガートを、語り手は旧約聖書を持ち出して描写する。つまり「族長 Jacob から愛を一身に受け家督を譲ってもらえる末っ子の Joseph に対し嫉妬心に燃える Joseph の兄達の代弁者」(96)のような眼差しを、クラガートに見てとった、と語り手は記す。Billy が「高潔なる非文明人」で「Cain が都市を建設する以前の世界……から連れてこられたようだ」とするならば (65, 53), 教育がありインテリのクラガートはカインが代表する都市文明人間、あるいはカインその人に等しいと言えるだろう。そしてビリーのほうは神＝父の愛を受け、そのために嫉妬に燃える兄カインに殺されるアベル (Abel) に等しき存在と言えはしまいか。さらに言わせてもらえば、神に愛される「若く見目麗しい David を思うあまり、イスラエルの初代国王 Saul の顔を曇らせる嫉妬の片鱗」を (78), クラガートの顔に見ることも可能となるはずである。もっともテキストではクラガートはそのような表情を押し殺していたとあるのだが。ここで想起されるのが、Robert Martin の示唆するサタンとキリストとの関係である。マーティンは以下のような図式を提示する。①サタンとは神から愛されなかったキリストの兄弟に相当する。②キリストだけが父なる神に愛された。③同様に、キリストに準えられる

ビリーだけが父親的人物たる艦長ヴィアによって溺愛された。④ビリーの（擬）兄弟としても捉えることが可能なクラガートは、艦長ヴィアから愛されなかった。愛されなかったどころか、逆に疎んじられた。このような示唆には、なるほどと頷けるところがある。

作品 *Billy Budd* には Ann Radcliffe のゴシック小説『ユードルフォの謎』(*The Mysteries of Udolpho*, 1794) への言及がある。ゴシック小説の隆盛と中産階級家族との関係を論じる Kate Ferguson Ellis は、ミルトンの『失樂園』を引き合いに出しつつ次のように指摘する。つまり、サタンとは父なる神に叛旗を翻した次男であり、長子長男相続に反対し兄弟間の平等を要求する点で、サタンは当時の人々の中産階級的民主主義的要求を代弁する働きもしたのだ、と (43)。作品『ビリー・バッド』でもサタンの人物のクラガートは、業績能力に基づく公平な人事を艦長ヴィアに要求しているから、たとえ捻じ曲がった形にせよ、民主主義を要求していると考えてもよさそうだ。

しかしながら、メルヴィルは、エリスの言うゴシック小説のプロトタイプに一捻りを加え、作品『ビリー・バッド』を、より忠実な形で聖書に回帰させる形にしている。作品では、サタンに準えられるのは第二子ビリーではなく長男にあたる第一子のクラガートであり、その第一子が父親に民主主義ではなく長子相続制の維持を要求し、そしてこの長子相続制の前提となる家父長制を擁護する側に第一子は立っている。クラガートが軍艦内の家父長的階層制度、秩序を維持する任務を負う下士官に就くのも、当然のことかと思われる。

先にイェール学寮の参照箇所でも言及したように（本稿の I 「Foucault 的家族監視戦略」）、父権的秩序を維持するとは国家秩序を維持することに繋がる。父権的国家秩序を維持しようとする者は、愛国主義者／帝国主義者の仮面を被る。愛国主義者／帝国主義者——作者メルヴィルの生きた19

世紀のアメリカの文脈に即して言えば、「マニフェスト・デスティニー」(Manifest Destiny) の信奉者——は、William Blackstone の考えを拠り所にしてしている。ブラックストンの思想はアメリカ建国の父 Alexander Hamilton らによって吸収され、アメリカ保守主義はこの思想に論理的根拠を与えられたと言われている。そして、ブラックストン自身は同性愛を法的に禁じた法学者であることが知られている。

ここで、作品『ビリー・バッド』でメルヴィルが法学者としてのブラックストンを称えつつも、ブラックストンは人間の心の襞までは読み取れないと揶揄していることも思い起こす必要がある。無論、心の襞とは同性愛の心理である。同性愛や女性的なものを排除するホモソシアル (=男性共同体)・システムを強化し、ホモソシアル組織のトップである父親的人物ヴィアの気を引こうとするクラガートの同性愛的心理を読み取るなど、ブラックストンのような法学者には土台無理だというわけである。ところがそのようなホモフォビックなブラックストンをホモセクシュアルであるクラガートは範として仰ごうとしているのだから、クラガートがブラックストンの国家主義を装ったところで、所詮、うまく立ち回ることなどできようはずもない。

愛の欠落したホモソシアル空間、先に述べた互いに不信感をいだき合う肛門的社会なる競争主義的階層組織のなかで仲間を作る手っ取り早い方法は、文化人類学者の René Girard のいうように共通の敵を作ることであろうし、人間の自然状態を闘争状態と説く Thomas Hobbes の言葉を借りれば、「内 (Home) には平和、外 (の敵) に対しては共同防衛」を実践にうつすことであるかもしれない。しかしながら作品『ビリー・バッド』では敵は外でなく、むしろ同性愛という形で内に存在する。しかもヴィア艦長をはじめ多くの乗組員がその逸脱行為に秘かに加担していたため、クラガートのホモソシアル作戦は十全に機能しないばかりか、彼のブラックストン

的な愛国主義者、帝国主義者としての装いも、その綻びをあらわにする。

繰り返すが、愛国主義者、帝国主義者としての仮面を被りつつも屈折した民主主義者の立場で、弟の座を占めるビリーを溺愛する父＝父の座を占める艦長ヴィアを非難し、さらに父権主義体制を堅持する態度を装い、父の座を狙っているとして弟を父に告発するのがクラガートである。そのクラガートがビリーをいたぶるに至った最大の動機は、ヴィア艦長がお気に入りのビリーに与える愛情を巡るクラガートの嫉妬心にあったわけだが、その嫉妬心をさらに煽り立てたものは何だったのだろうか？ これはジラルの言う欲望三角形、あるいはセジウィックの言うホモソシアル同盟（男性中心社会に於いて共同利益を追求する男性同盟）がクラガート、ビリー、ヴィアの三者の間で成立しなかったことにも関わってくる。ちなみに「欲望の三角形」説とは、二人の者が同じ対象を欲望するとき、やがてその対象を手に入れる欲望自体は後退し、二者の関係もライバルというよりむしろ同盟関係に変容し同性愛的な仲間意識さえ生まれるという理論で、セジウィックのホモソシアル理論とも見事に響きあう理論である。なるほど確かに少なくともクラガートの側で同性愛的な欲望をライバル相手ビリーに抱いていることは、明らかである。「禁止されていなかったのならば、そして運命がこうでなかったのならば、ビリーを愛することだってできたのに」（88）、と歯軋りするクラガートの姿を、語り手は包み隠すことなく描写してみせているからだ。しかし、クラガートはヴィア艦長の愛情を独占したいという欲望を、断念しはしなかった。ライバル意識剥き出しのクラガートは、自分が相手にライバル視されていることさえ意識しない無垢なビリーと対峙する。作品『ビリー・バッド』で展開される歪んだ形の愛は、ホモソシアル理論も「欲望の三角形」説でも説明できない。本論考の「Ⅱ．Anal Society を生きる男達」の末尾で筆者は、クラガートのサディスティックな心理メカニズムはセジウィックのホモソシアル理論からでは

説明し切れないのではなからうか、と疑問を呈しておいたが、ここに至って、その疑問もきわめて妥当なものであったことが判明する。

この問題を解く足掛りとしてフロイト派心理学者の Nathanson のナルシズム論を参照枠として援用してみたい。⁴⁾ ネイサンソンによれば、精神を病んだ者は、自己完結型の人間を目にすると、そこに決して正当化することのできない優越性の主張として認められるものを見てとり、屈辱的な怒りを覚える、という。ネイサンソンはその心理機構を次のように説明する。

自己完結・自己閉塞した人間は、他者からの働きかけ、つまり互いと互いとを結びつけ、愛情で繋がりあうことを可能にする他者の側からのあらゆる試みを見無視する。[自己完結型人間の態度]は、[神経を病んだ]他者に屈辱的な怒りを呼び起こす。……神経を病んだ者達にとっては、単に自己完結した人間がこの世の中に存在する事実さえ何か耐え難いものになる。(202)

ここで作品『ビリー・バッド』に立ち返りたい。ビリーが浮かべている表情は安らかに寝息をたてている幼児のそれに等しい。「子供部屋では、幼児がすやすやと眠っている」。「夜中の静まりかえった暖炉の炎からは、ちらちらと戯れるように柔らかな光が、静かにそして神秘的にその子の頬のエクボにかかったりかからなかったりする」(109)。ここで、暖炉の火が象徴するものは、情愛に満ち溢れた中産階級の家と母親の愛、あるいはジェンダー区分が、はや意味を成さないクィア (queer) 空間を作り上げている軍艦ベリポテント号の事情に即して言うならば、母親的な父親ヴィアがビリーの上に降り注ぐ愛、となるだろう。そしてビリーは、母親（あるいは母親的父親）の胸で眠る、十分に食事を与えられた乳飲み子として

捉えることが可能となる。つまり、クラガートの眼には、親以外の他者は必要としない自閉的完結状態というナルシシストの理想的極致にあるものとしてビリーは映る。ビリーが幼児と等しい存在であるとみなしてよいことは、「クラガートはお前をおもしろくなく思っている」(71)とビリーに忠告するダンスカー、旧約聖書の預言者を髭髯させる風貌の老水兵ダンスカーが、「なにか測りがたい深遠な (recondite) 理由」(70)から、ビリーのことを呼ぶのに、いつも Baby と呼ぶことから確認できる。ちょうど、旧約聖書の美少年の David、羊飼いの末っ子で神の秘蔵っ子 David が、大男の Goliath を殺し手柄をたてように、艦長ヴィアの秘蔵っ子ビリーがインテリの怪物クラガートを殺し手柄をたてる。旧約聖書の国王 Saul は手柄をたてた神のお気に入りのダビデに嫉妬する。同様にクラガートは自分を押しつけて、いや自分を殺し、艦長の寵愛を一身に受けるビリーを嫉妬する——そのようなシナリオがダンスカーやクラガートの脳裏をかすめたことは、想像するに難くはない。実際にテキストではダビデ、サウルへの言及が成されている。ビリー同様、その出自が明らかでなく孤児同然のクラガートは、ビリーが軍艦内で家庭の至福 (Domestic Happiness) を味わっているのとは対照的に、そこから排除されているのだから、ビリーを見るにつけクラガートは一層、鬱屈した思いを募らせる。幼子イエスをも連想させる無垢の象徴ビリーを見るにつけ、サタンとしてのクラガートは憎悪を募らせる。

幼子イエスとの関連では聖フランシスコが頭をよぎる。聖フランシスコは幼子のように神に甘える自分を意識したが、逆に幼子としての神の子イエスを前にしたとき、大人となるように、と神から求められていることを悟り、人々にもそれを説いたという。神学的次限の話はさておき、発達心理学の観点から言うならば、インテリのクラガートは聖フランシスコとは異なり、情緒的に大人になりきれしていない神経を病んだ人間として診るこ

とができるだろう。

ところで乳飲み子として描かれるビリーは、中産階級女性をターゲットとした19世紀アメリカのコマーシャルリズムのうちに垣間見ることが可能である。資本主義、商業主義の波を浴びながら、当時のドメスティック・イデオロギーの磁場を強く受けたセンチメンタル文化は、亡くなった子供を綺麗に着飾って写真にすることを、実際、流行させた。このような写真は21世紀を生きる我々には不気味以外の何ものでもないし、このような写真をまざまざと眺めること自体、疚しさというか死者への冒瀆というか、“Annabel Lee” (1849) なる詩に於いて死体嗜好症／小児性愛症を謳いあげた Poe 的趣味をもち合わせていない者にとっては、ホーソーン研究者でなくても、多少なりとも罪の意識を禁じえないわけであるが、実際に亡くなった直後の幼児を写真にすることを流行させたのは事実らしい (Sánchez-Eppler)。そもそも子供が命を落とすことは、Harriet Beecher Stowe の『アンクル・トムの小屋』 (*Uncle Tom's Cabin*, 1852) の Eva St. Clare をはじめ、Luisa May Alcott の『若草物語』 (*The Little Women*, 1868) に登場する Beth March など、女性流行作家の中心的テーマとなった事実も忘れてはなるまい。ジェンダー現象には鋭いメスを入れたメルヴィル、文筆業に携わる者として女性流行作家達との競争に負けたメルヴィルのことだから、このようなセンチメンタル文化に無関心でいられようはずもあるまい。Niel L. Tolchin は女性中心のアメリカ19世紀消費文化のもとで作られた死者を悼む喪の習慣は、小説の主人公が女性化して描かれる上で、大きな影響力を及ぼしている、と指摘している。トールキンによれば、「主人公 Billy Budd はその名の示すとおり、喪の手引書に集められたありふれた詩のフレーズである『つぼみのうちに摘み取られてしまった花 (nipped in the bud)』に等しい。彼の出自としては、ドアノッカーに掛けられた絹縁取りされた籠のなかで見つけられた孤児^{みなしご}となっている。[このような籠は]、

喪に服している家のドアノッカーに当時アメリカ人が掛けることにしていた花を入れた籠をイメージさせる」(33)、ということである。

ここで作品中、19世紀アメリカ——Cooper, Twain, James らによって無垢とか野性のイメージで表象されてきたアメリカ——そのアメリカの未来は無垢そのものの野生児ビリーによって擬人化されている、と解釈するアメリカニストの Sacvan Bercovitch の示唆が妥当であるとするれば(“Melville’s Search for National Identity”), ビリー＝アメリカという等式が成立する [等式①]。一方、そのアメリカを象徴するナイアガラ [ナイアガラ＝アメリカ] [等式②] が、メルヴィルにより評論 “Hawthorne and His Mosses” の中では、ホーソンとして擬人化されている (414)。つまりナイアガラ＝ホーソン [等式③] である。ならば、②と③からアメリカ＝ホーソンという [等式④] という関係が成立していることは、形式論理的にも明白である。ここでホーソン＝アメリカ [④] なる等式と、そして先ほど述べたビリー＝アメリカ [①] なる式を整理すると、この二つの等式は、ビリー＝ホーソンなる等式 [⑤] に収斂する。

結語の試み：Hawthorne/American Innocence/American Beauty を憎悪する Melville

さて、ここまでくると、クラガートの眼に映るビリーの像が、作者メルヴィルの脳裏に刻み込まれたホーソンの残像へと転写転換する可能性がおぼろげながらも見えてくる。そのプロセスを明らかにする前に、ホーソンとメルヴィルは見事なまでに対象的な人生を歩んできたことを確認しておくことにする。独身時代、母親や女兄弟から大事にされた一人息子のホーソン。かたや自分はナンバー・ツーとして、できのいいナンバー・ワンの兄 Gansevoort に両親、特に父の愛情のすべてが注がれるのを目のあたりにしてきたメルヴィル。その父が亡くなり、眉目秀麗かつ学業成績抜群

だった兄も若死にするまでは、家族にほとんど省みられることのなかったメルヴィル。Walter T. Herbert がホーソーンの伝記的事実を掘り起こす作業のなかで明らかにしたように、誰もが羨むような理想的中産階級を築き上げたホーソーン。その一方、子供達にも妻にも毒舌を浴びせ、妻を階段から突き落とすなど、ドメスティック・バイオレンスの嵐が吹き荒れた家庭内で暴君として振舞ったメルヴィル。押しも押されもせぬ国民的大作家になり、時代の寵児^{セレブ}になったホーソーン。他方では、作品『ピエール』発表以後、世間からも家族からさえも狂人扱いされ、やがてはその世間からも忘れ去られたメルヴィル。父親に捨てられ、ホーソーンに捨てられ、その果てには世間（アメリカ）に捨てられたメルヴィル。クラガートがピリーを愛しつつもピリーの innocence（無垢）と beauty（美）を激しく憎んだように、メルヴィルもまた国民作家として称えられ、なおかつ眉目秀麗な顔立ちで有名であったホーソーンが代表するアメリカン・イノセンスとアメリカン・ビューティを憎んだのではないだろうか。挙句はホーソーンその人を憎んだのではないだろうか。

ホーソーンは生前、メルヴィルのたび重なる愛の申し入れを拒否し、メルヴィルを必要としなかった。そのようなホーソーンは、メルヴィルの目に自己完結的／ナルシシスティックな幼児と写ったはずである。そして、亡くなった子供を写真にするという当時のセンチメンタルなアメリカン・サブカルチャーの中で、乳飲み子のようにベイビーと呼ばれ、無垢のまま処刑にふされるピリーをキリストのコピーとして、いや安物のキッシュとしていささか甘ったるく描きながらも、ホーソーンが頭の片隅から離れなかったメルヴィルは既にどこかで見たことのある感覚＝既視感＝*dé-jà vu*に襲われたのではないだろうか？ それは、ちょうど税関でボロ切れと化した緋色の文字Aを手にし、自らの胸に押し当てたホーソーンに戦慄が走ったという状況に匹敵する状況だったと言えはしまいか。魔女裁判で陣

頭指揮を執った祖先の業があたかも輪廻の形をとって我が身に憑依したかの如き幻覚にホーソーンは、その時、襲われた。それがメルヴィルの場合だと、既に亡くなったはずのホーソーンが、自己完結的の表情を浮かべる幼児の姿をとって再び自分の前に現れたということではないのだろうか。既に亡きホーソーンが亡霊的にメルヴィルの意識に回帰し、メルヴィルはそれを幻視したのではなからうか。

そもそもドメスティック・イデオロギーに最後までこだわり続けたホーソーンが、人種も階級もジェンダーも意に介さないクレオール的な愛の民主主義を夢想したメルヴィルを、受容れようはずもあるまい。メルヴィルの求愛に対するホーソーンの応答は、クィア (Queer) 批評家の Robert K. Martin が指摘するように、『大理石の牧神』(*The Marble Faun*, 1860) の中の Donatello に対する Kenyon の返答から汲み取ることが可能であろう——「僕は男で、男と男の間には超え難い溝がある。だから男は親密な助けとか思いやりを同胞の男からは受け取らない。女性から受け取るんだ。母親とか姉妹とか妻からだ。」(285)

メルヴィルは目前に迫る自身の死を前にし、自分を悪魔的なクラガートに重ね合わせ、亡くなって久しい Hawthorne に対するどうにもやりどころがなかった積年のルサンチマンを抉り出し、それを無垢で罪のない両性具有ピリーに投げかけた。そして、Ralph Wendell Holmes や Ralph Waldo Emerson の証言からも明らかなように (Mellow 445, 28), 少女のようににはかみ、眉目秀麗だったホーソーンと二重写しになる美青年ピリーに、愛を拒絶された者としての怒りを炸裂させたのではなからうか。このように結論づけたところで決定的外れとはならない、と思うのであるが、どうだろうか。

注

- 1) 原典は Herman Melville, *Billy Budd, Sailor (An Inside Narrative)*, eds., Harrison Hayford and Merton M. Sealts, Jr. (Chicago: U of Chicago P, 1962) にあたり、括弧内に引用ページを示した。なお、本文中で引用箇所は私訳にしてある。
- 2) *Domestic Education* (Amherst, Mass.: J. S. and C. Adams, 1840), p. 16. Dimock 158-9 を参照。
- 3) ヴィア艦長のジェンダー的曖昧性について、筆者は既に以下で論じている。Eitetsu Sasaki, “*Billy Budd* as a Mock-Hagiology: Accusation against the Patriarchs by Melville, a Psychologically Battered Child *Budding* into a Sanctimonious Child-Beater,” *English Review* 19 (2004, 12): 1-32.
- 4) ネイサンソンはナルシシズムをスマッグネス (smugness) という用語に置き換えて説明する (“Shame/Pride Axis”)。

引用文献

- Adamson, Joseph. *Melville, Shame, and the Evil Eye: a Psychological Reading*. Albany: State University of New York Press, 1997.
- Bercovitch, Sacvan. *The Puritan Origins of the American Self*. New Haven, 1975.
- “Melville’s Search for National Identity: Son and Father in *Redburn*, *Pierre* and *Billy Budd*.” *College Language Association Journal* 10 (March 1967) 226-27.
- Bertolini, Vincent J. “The Erotics of Sentimental Bachelorhood in the 1850s.” Chapman and Hendler 19-42.
- Bezanson, Walter E. “Selection from the Introduction to the Hendricks House Edition of *Clarel*.” Wilson 77-90.
- Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. London: GMP Publishers, 1982
- Brodhead, Richard H. “Sparing the Rod: Discipline and Fiction in Antebellum America.” Fisher 141-170.
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge, 1990.
- Chapman, Mary and Glenn Hendler, eds. *Sentimental Men: Masculinity: Masculinity*

- linity and the Politics of Affect in American Culture*. Berkeley: U of California P, 1999.
- Chase, Richard. *Herman Melville, a Critical Study*. New York: Macmillan, 1949.
- Cohen, Henning and Donald Yannella. *Herman Melville's Malcolm Letter: "Man's Final Lore."* New York: Fordham UP and The New York Public Library, 1992.
- Creech, James. *Closet Writing/Gay reading: the case of Melville's Pierre*. Chicago: University of Chicago Press, 1993.
- Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture*. New York: Oxford UP, 1986.
- Dimock, Wai-chee. *Empire for Liberty: Melville and the Poetics of Individualism*. Princeton: Princeton UP, 1989.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. New York: Doubleday, 1977.
- Ellis, Kate Ferguson. *The Contested Castle: Gothic Novels and the Subversion of Domestic Ideology*. Urbane: U of Illinois P, 1989.
- Fisher, Phillip, ed. *The New American Studies*. Berkeley: U of California P, 1991.
- Grunberger, Béla. *Narcissism: Psychoanalytic Essays*. Trans. Robert D. Denham. Bloomington: Indiana UP.
- Haberstroh, Jr., Charles J. *Melville and Male Identity*. Cranbury, NJ: Associated University Presses, 1980.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Marble Faun*. 1860. Vol. 4 of *Centenary Edition*. Eds. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1971.
- Leyda, Jay, Ed. *The Portable Melville*. New York: Penguin, 1952.
- Martin, Robert K. *Hero, Captain, and Stranger: Male Friendship, Social critique, and Literary Form in the Sea Novels of Herman Melville*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1986.
- Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor (An Inside Narrative)*. 1924. Eds. Harrison Hayford and Merton M. Sealts, Jr. Chicago: U of Chicago P, 1962.
- . *Correspondence*. Ed. Lynn Horth. Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1993.

- . *Moby-Dick; or the Whale*. Ed. Harrison Hayford. Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1988.
- . *Pierre or the Ambiguities*. Eds. Harrison Hayford, Hershal Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1971.
- . *Redburn: His First Voyage*. Eds. Harrison Hayford, Hershal Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1969.
- . *Selected Poems of Herman Melville*. Ed. Hennig Cohen. New York: Fordham UP, 1991.
- . *Clarel: A Poem and Pilgrimage in the Holy Land*. Eds. Harrison Hayford et al. Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1991.
- Merish, Lori. *Sentimental Materialism: Gender, Commodity Culture, and Nineteenth Century American Literature*. Durham: Duke UP, 2000.
- Milton, John. *Paradise Lost*. 1667. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Nathanson, Daniel L. “Shame/Pride Axis.” *The Role of Shame and the Search for Identity*. Ed. Helen Block Lewis. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum. 183-205.
- Newbury, Michael. *Figuring Authorship in Antebellum America*. Stanford: Stanford UP, 1997.
- Powell, Timothy. *Ruthless Democracy: a Multicultural Interpretation of the American Renaissance*. Princeton: Princeton UP, 2000.
- Renker, Elizabeth. *Strike through the Mask: Herman Melville and the Scene of Writing*. Baltimore: The Johns Hopkins UP.
- Rogin, Michael Paul. *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville*. Berkeley: U of California, 1979.
- Sánchez-Eppler, Karen. “Then We Clutch Hardest: On the Death of a Child and the Replication of an Image.” Chapman and Hendler 64-85.
- Sasaki, Eitetsu. “Michael Newbury, *Figuring Authorship in Antebellum America*. Stanford: Stanford UP, 1997, viii+251pp. Figuring out the Figures of the Inchoate Professionalism of Antebellum Authorial Figures.” *Forum* 9 (2003, 5): 91-98.
- . “*Billy Budd* as a Mock-Hagiology: Accusation against the Patriarchs by Melville, a Psychologically Battered Child *Budding* into a Sanctimonious Child-

- Beater.” *English Review* 19 (2004): 7-38.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Sontag, Susan. *Against Interpretation and Other Essays*. New York: Picador, 1961.
- Tolchin, Neal L. *Mourning, Gender, and Creativity in the Art of Herman Melville*. New Haven: Yale UP, 1988.
- Williams, Anne. *Art of Darkness: a Poetics of Gothic*. Chicago: U of Chicago P, 1995.
- Wilson, James C., Ed. *The Hawthorne and Melville Friendship: An Annotated Bibliography, Biographical and Critical Essays, and Correspondence Between the Two*. Jefferson: McFarland, 1991.
- フィリップ・アリエス『子供の誕生：アンシャン・レジューム期の子供と家族の私生活』杉山光信, 杉山恵美子 訳 1980
- リュース・イリガライ『ひとつではない女の性』訳 棚沢直子 勁草書房 1987
- ダイアナ・ギティンス『家族をめぐる疑問：固定観念への挑戦』金井淑子, 石川玲子 訳 新曜社 1990
- B. グランベルジェ, J・C=スミルゲル『「異議申し立て」の精神分析』岸田秀 訳 学苑社 1985
- J. クリステヴァ『恐怖の権力：＜アブジェクション＞試論』訳 枝川昌男 法政大学出版局 1984
- ルネ・ジラルール『身代りの山羊』織田年和, 富永茂樹 訳 法政大学出版局 1985
- .『世の初めから隠されていること』小池健男 訳 法政大学出版局 1984
- .『欲亡の現象学：文学の虚偽と真実』古田幸男 訳 法政大学出版局 1971
- .『ミメーシスの文学と人類学：ふたつの立場に縛られて』浅野敏夫 訳 法政大学出版局 1985
- ジャック・ドンズロ『家族に介入する社会：近代家族と国家の管理装置』宇波彰 訳 1991

黄昏の Melville に忍び寄る Hawthorne の影：辞世の書 *Billy Budd*

野田正彰「東京大空襲：63年を経て消えぬ心の傷跡」『朝日新聞』2008.12.19

18

ミシェル・フーコー『知の考古学』中村雄二郎 訳 河出書房新社 1981

———.『監獄の誕生：監視と処罰』田村俣 訳 新潮社 1977

S. フロイド『フロイド選集第5：性欲論』懇田克躬 訳 日本教文社 1974

トマス・ホップズ『リヴァイサン（国家論）』世界の大思想 13巻 水田 洋
他 訳 1970

ジョン・ミルトン『ミルトン英詩全訳集 上, 下』宮園光雄 訳 金星堂
1983

ケイト・ミレット『性の政治学』藤枝濤子〔ほか〕共訳 ドメス出版 1985

**Melville in the Twilight of his Life:
Billy Budd as Dying Words**

——An Attempt at a Queer Reading of Hawthorne's Shadow——

Eitetsu SASAKI

This paper discusses two questions: first, how Melville imperceptibly inserted an image of Hawthorne into his novella *Billy Budd*; and second, how that rough-hewn image of Hawthorne could be excavated from the text and re-worked into the image that Melville created.

The petty officer Claggart plays a crucial part in maintaining the patriarchic hierarchy of the Navy's *homosocial* community. Although Claggart demands that the paternal Captain Vere love all his men impartially, the demand bears no fruit: the Captain loves Billy better than him. Claggart is obsessed with his negative emotion, a mixture of envy and enmity at the pseudo-sibling Billy, and this emotion outdoes his positive emotions of love and admiration for Billy. Billy's image as an innocent, self-sufficient child is twisted and falsified by Claggart into an image that symbolizes non-acceptance, an image of a narcissistic baby who becomes smugly immersed in parental love and prevents anyone from approaching him affectionately.

Billy's innocent image conjures up that of Hawthorne, a writer well-known to both modern critics and those of his own era for his handsome, ambiguously-gendered appearance. The paper thus concludes that Claggart's hatred and reproach of Billy for his innocence and beauty reflected Melville's similar resentment toward Hawthorne.